

平成29年度 第2回桑名市総合教育会議 議事録

1. 日 時 平成29年11月30日（木）
開会 12時58分 閉会 14時43分

2. 開催場所 桑名市役所3階第2会議室

3. 出席構成員

桑名市長 伊藤 徳宇
桑名市教育委員会
教育長 近藤 久郎
委員 松岡 守
委員 佐藤 強
委員 稲垣 陽子
委員 松香 洋子
委員 安藤 智里

4. 構成員以外の出席者

(総務部)

総務部長 平野 勝弘
総務課長 日佐 龍雄
総務課課長補佐兼総務係長 近藤 光彦

(教育委員会事務局)

教育部長 南川 恒司
教育総務課長 山下 範昭
指導課長 野呂 はるみ
学校教育課長 高木 達成
教育環境整備室長 満仲 弘
指導課主幹 尾関 一夫
教育総務課管理係長 郡 厚

5. 議 題 (1) 小中一貫教育について
(2) ICT教育について
(3) 英語教育について
(4) コミュニティ・スクールについて
(5) その他

【総務部長】

会議に入ります前に、本日の会議の公開についてお諮りいたします。

今日は忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。

本日の会議を公開でさせていただいて、いわゆる非公開とすべき案件がございませんので、傍聴について希望者がいらっしゃいますので、傍聴人の入室をご了解いただきたいと思います。よろしくお願ひしたいと思います。

(傍聴者入室)

【総務部長】

ただいまから平成29年度第2回桑名市総合教育会議を開催させていただきます。

前回では、新学習指導要領を受けて、これからの桑名の教育をどのように進めるのかをテーマに、外国語教育、道徳教育、プログラミング教育の3点について議論をいただきました。

本日の会議のほうでは、4点、小中一貫教育、ICT教育、英語教育並びにコミュニティ・スクールについてご協議をいただきたいと思います。よろしくお願ひしたいと思います。

では、会議の進行につきましては、市長のほうから進行のほうをお願ひしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

【市長】

改めまして、皆さん、こんにちは。

今日は、大変お忙しい中、第2回の桑名市総合教育会議にご参加いただきましてありがとうございます。また、日ごろ、桑名の教育行政に対しましてご理解、また、ご協力賜りまして心から感謝を申し上げます。

今日は総合教育会議ということで、項目として4項目挙げさせていただいております。今、桑名でもさまざま議論をさせていただいている部分、また、これからより議論といいますか、しっかり進めていかなくちゃいけない部分というものを、項目を抽出させていただいて、今回、項目立てをさせていただいたところであります。委員の皆さんの忌憚ないご意見をいただきながら、桑名の教育がよりよいものとなるような会議にさせていただければなというふうに思いますので、よろしくお願ひをいたします。

それでは、座って進行させていただきますので、よろしくお願ひします。

一番最初ですけれども、事項書の1つ目、小中一貫教育についてを議題といたします。

まず、教育長から教育委員会事務局として、今どんなふうに進めているのか、どんなふうを考えているのかということについて、まずお話をいただきたいと思いますというふうに思いますのでお願ひします。

【教育長】

わかりました。

資料をご用意させていただきましたのでお配りします。

<資料配付>

それでは、よろしいでしょうか。

【市長】

お願ひします。

【教育長】

現在、4月に学校教育あり方検討委員会から答申を頂戴いたしまして、それに基づきまして庁内でこれから小中一貫教育について検討していく、特に、小中一貫校については、モデルとして多度地区に小中一貫校を多機能複合型施設として整備していくと、そんな計画を今、スタートに立ったところでございますが、地元の方々に説明をしている最中でございます。

その中で、次世代を担う子どもたちにとって有効な提案であると私どもが考えさせていただいている、特に、小中一貫教育の必要性といたしまして、学力の向上とか生徒指導上の問題、いわゆる中1ギャップの問題でございますけれども、それと、滑らかな接続というあたりを非常に有効なものだというような形でご説明をさせていただいているところでございます。もう少し私自身としては受け入れていただ

けるものだなというふうを考えていたんですけれども、なかなかやっぱり思った以上にいろいろご質問、あるいは、ご懸念のご議論もいただいているところがございます。特に、どこにつくるのかははっきりしてから議論してほしいというようなことも伺っているところでもございます。

それと、ちょうど資料1をお話しさせていただいたんですけれども、これにつきましては、今、多度地区で当面、小中一貫教育の必要性ということも話をさせていただいているんですが、あわせて多度地区の小中学校の児童生徒数の推移もお示しをさせていただいているところがございます。ここに示させていただいた多度中小学校、多度東小学校、それから、多度北小学校、多度青葉小学校、そして多度中学校と、いずれも児童生徒数についてはかなり減っているということでございます。その中で私どもとしては、一番懸念していますのが、来年度には再び複式学級という学校もございます。そんな中での取り組みでございまして、今後、子どもたちがやはり議論しながら考え合う、そんな授業をしていくためにも小中一貫教育というのは必要じゃないかなというふうにお示しをしているところがございます。

それから、資料2のほうの少し話をさせていただきたいんですけれども、そんな中で、多度地区の皆さんとしてはほんとうにしっかりとしたものができるのかというようなご懸念があるわけがございますけれども、それについてはやっぱり丁寧にこれからもご説明をさせていただこうというわけがございます。当面、2020年度から次期学習指導要領が全面実施されるということでございますので、そのためには幾つかのシステムを変えていく必要があるということでございまして、私ども桑名市としては、平成19年から10年以上、小中連携のことをやってきたり、あるいは、平成27年から3年間にわたって小中一貫教育の研究もしてきたという中で、ぜひ2020年度から現行の形、施設の分離型、隣接型でございませけれども、小中一貫教育をスタートさせたいと、そんな思いを持っているわけがございます。

それから、なぜ、小中一貫教育なんだと、これもよく問われたんですけれども、今まで小中連携でやってきたのは一過性というか、イベントが中心でしたので、ぜひ日常化できないかなということに進めたいというふうを考えているわけがございます。

それで、次の資料の4と5のほうに進みたいんですが、そんな中で2020年度からやりたいんですが、そうするとやはり準備期間が必要だということで、来年度からいよいよそれぞれの中学校区でお願いをしていきたいということでございます。それにつきましては、今日、もう第1回目があるんですけれども、小中一貫教育の基本方針策定委員会というのを、これは校長先生とか関係の先生方、それから、あり方検討委員会でお世話になった赤沢先生を中心になんですけれども、どういう方針で小中一貫教育を進めていくのというのをお決めいただければなというふうに思っているところがございます。

1から6まで、案として持ってきたわけがございますけれども、1、2につきましては小中一貫教育の目指す子ども像とか9年カリキュラムの話がありますし、昨今、私どもとして話題にしています児童会とか生徒会の問題、それから、後でやっていただくICTのこととか、英語の教育、そして、この小中一貫教育とは裏表の関係になると思うんですけれども、コミュニティ・スクールと、こういうところをやっていたらどうかというところでご提案をさせていただきたいということで、私ども教育委員会事務局としましては、そんな取り組みを考えているわけですが、ぜひこの際、いろんなご意見をいただけるとありがたいなと思っているところがございます。

【市長】

では、教育長から教育委員会事務局が今、どんなことを考えているのかという話をいただきました。

1つ目は、モデル校として進めようとしています多度の地域の子どもたちの推移と申しますか、大分子どもたちの数が減ってきているというのと、複式学級がまた出てくるなというのが見えてきたということと、それから、もう一つの大きな話としては、全市的に2020年度から小中一貫教育のスタートを目指すとして、そのためにはどんな準備が要るのか、どんなように進めていくのかというような説明があったところでありますので、これを踏まえて皆さんからのご意見を賜りたいというふうに思います。

じゃ、稲垣さん、よろしくお願ひします。

【稲垣委員】

わかりました。

この問題ってそんなにすごく簡単じゃないなということを今すごく感じています。実は、この間、説明会にもお邪魔させていただいて、実際、多度の住民の皆さんの声も生で聞かせていただきました。すごく問題が複雑なんです。私が今、率直に感じていることは、もしほんとうにお金が潤沢にあったら、この小中一貫教育をやるだろうかというところをほんとうに教育委員会として考える必要があるのかなというふうに、何か改めてすごく思ったんですよね。じゃ、小中一貫って一体、教育としてどういうよさがあるのかと、ほんとうに何でこれを今やらなきゃいけないのか、お金がないとかそういうことではなく、教育という見地でまずしっかり考える。やっぱり教育委員会としてきちんとそういうメリッ的な意見を統一して持つ必要がまずあるなというのが、すごく強く感じたことですね。

じゃ、私はどう思ったかという、このままでいいのかといたら、このままでいいわけにはいかないだろうと思うんですよね。ほんとうに私、子どもが小学校に行ったとき何を思ったかという、結構愕然というか、要は、自分の小学校、中学校のときと子どもが小学校に行くときの雰囲気が全然変わっていないことに、ある意味、懐かしさとともに、正直ちょっと危機感を持ったんですよ。だって、企業とか会社とか社会ってこんなに変わっているのに、私の30年前と全く同じ状況でうちの子は勉強するんだと思ったときに、別に先生の学習内容が変わっていたとしても教育の持っている雰囲気が変わっていないのかと思ったときに、ちょっとこれでいいのかなと。特に、今の時代、このままでいいのかなと。

私、いろんな海外とかかかわると、やっぱり日本人、もう相手にされていないよねということを時々言われるんですよね。このままでいいんだろうかと。実際、いろんな企業さんで50歳の方が今、一生懸命、リーダーの仕事しながら英語の勉強をして海外と競争をしているという状況を踏まえると、何か教育ってもうちょっとほんとうに手を入れなきゃいけないんじゃないかと。もちろん何か古きよいものとか、少ない人数で温かくとかもあると思いますけど、やっぱりグローバルっていろんな人とかかかわることだと思うので、そういう意味で今回、小中一貫の何かやっていく、この後のICTとか英語とかコミュニティ、いろいろあると思うんですけれども、それを実現する小中一貫をやらなければ、逆にそれをやらなければ意味がない。ただ形を用意するのは意味がないなというのはすごく思ったんですよね。そういう意味で、アクティブラーニングというのは当然の流れだと思うし、それは人数も必要になってくるでしょうし、いろんな価値観に触れるというのは当然の話になってくるかなというのがまず1個。

ただ、今回、すごく思ったのは、教育って教育だけで成り立たないんだなというのは当たり前、地域があつての教育ということなので、地域の人たちの疎外感とか置いてきぼり感とか不安ってそのまま子どもにうつると思うんですよね。そこは無視しちゃいけないことなんだなと思って。ただ、これって教育という考え方と、多度のまちづくりという考え方だと思うので、ここはまちづくりというところできちんとやってほしいです。何か教育委員会に全部押しつけてもちょっと、押しつけていないと思いますけど、済みません、何かきちんとソフトとハードをやっぱりきちんと分けて考えないと、何かすごくごっちゃごちゃのまま20年も待つてふたをあけて子どもがいなくなって、さあ、今からといったときに、じゃ、誰が責任をとるんですか、20年前のあのときにという話って一番愚策だと思うんですよね。なので、何かほんとうに30年とか何か別に桑名でいいじゃないとか、もちろんそうで、世界を私たちは考えながら何か見ていく必要ってすごく。だって町工場だって今、世界とつながる時代ですよ。すごくそういうのがあったのと、あと、ほんとうに逆に教育の桑名みたいに、何かこういうのをうまく利用して、例えば、この間も中国人と話したら、中国人はもういい学校に向けて家族が引っ越すだけじゃなく、もう一族郎党、要は、子どもの世話をするのがおじいちゃん、おばあちゃんなので、もう全員が引っ越しするぐらいで、実際、やっぱりいい学校に子どもが、これだけ情報化があれば、すごくいい小中一貫ができれば、そこにやっぱり人が流れてくるというのもあり得る話ですよ。何かそういう新しいまちづくりとかの可能性もあるのかなとか、ちょっと理想論かもしれませんが、何かいろんな要素がある、ただ単なる小中一貫じゃないんだなというのを今、すごく感じております。

【市長】

ありがとうございます。

ほんとうにそのとおりの部分があるなど今、伺っていて思いました。1つ、やっぱり教育の現場が変わっていないことの驚きというか、30年前と変わっていないと、確かにそういう部分もありますけれども、やはり不易流行じゃないですけども、変えていいところと変えちゃいけないところがあって、ただ、変える部分は特に世の中に出ればというか、ほんとうに大学を出て世の中に出るとそこに急に気づくみたいな部分があるので、もう少しその前の段階から変わっていることに気づけるような体制を教育の現場でもつくっていききたいなというふうに思いますし、かといって、それと同時にまちづくりも教育と一体化している部分はあります。今回、説明会は教育委員会のほうに稲垣委員は行っていただいたんですか。

【教育長】

いやいや、説明会ですから統括監とも一緒にやったんですよね。今回は教育の内容がメインですので、私を中心に説明をさせていただいたということ。

【市長】

うちもまちづくり推進課というものをつくらせていただいて、そこも学校の小中一貫は非常に大事なまちづくりの基本の基礎となる部分だということで、一生懸命、何人張りついているかな、4人ぐらい張りついて頑張っていますので、まさにその気持ちを持って地域の方によりしっかりと向き合っていくということなのかなというふうに思いますね。この2つ、ちょっとしっかりと受けとめたいなというふうに思います。

では、次、松香委員、お願いいたします。

【松香委員】

私は英語が専門で、コミュニケーションとかということから考えると、桑名市は11校ぐらいが単学級なんですか。

【教育長】

そうですね。

【松香委員】

単学級の学校というのは、子どもが、ただでさえ内弁慶な日本全体の子どもの中でさらに内弁慶になるのかなと思うので、単学級というのはなかなか交流する癖がつかないんですね。だから、そういうのは解消できたらいいのかなと単純に考えている。いろんな問題が、午前中からお聞きしていると、たくさん問題があるというのはよくわかります。どうにか子どもの将来を考えて動くしかないんだというのと、あと、私が思うのは、今度、英語が教科になるんですけど、今までやっていた小学校は、例えば、小学校で英語をやっていますね、それは遊びですねというて、中学校の先生がゼロから始めるんですね。高校に行くと、また、おまえたち、何もわかっていないんじゃないかというて、またゼロからやるんですね。こんな3回もゼロからやっている英語教育がうまくいくわけなくて、国民の多くが実は9年やったけどとか、10年やったけどとか、しゃべれませんとか、できませんという人が大部分なんですね。これはほんとうに教育の無駄で、そんなことあってはいけないと思うんですね。他教科もそういうことがあるのかもしれませんが、英語はこれから、教科になるときが直しどきなので、ぜひ9年間で、中学校3年生になったら、どうにか一生分の英語はしゃべれる、どんな職業についても人と出会ったとき、簡単な交流ができたりとか、自己紹介ができたりとか、そういう基礎学力みたいなのが中学校3年生までに欲しいなと私は思っていて、いろんな人生を歩むと思うんですね。でも、やっぱり英語が嫌だから全部逃げることはもうできないと思うので、それに生活の中に今、英語がいっぱいありますから、そういう生活支援というのものもあるし、やっぱり人生の中で算数の九九を覚えないと困ると同じように、英語のほんとうの初期の基礎はみんなできてもいいなと思っているので、そういう意味ではすごく小中一貫というのは、学習が継続するということではすごく希望しています。

【市長】

ありがとうございます。

1つは、コミュニケーションをとる相手がたくさんいればいるほどいいんじゃないかということなんです。

ね。それが少なければ少ないと、やっぱりほんとうに内向きの子が育っちゃうんじゃないかという懸念と、それから、先ほど稲垣委員もおっしゃっていたように、ICT教育や英語教育やコミュニティ・スクールみたいな、こういうものを実現するための一貫教育にしていこうというのが大事じゃないかというようにご意見かなというふうにいただきました。ありがとうございます。

では、次、安藤委員、お願いします。

【安藤委員】

きれいごとではなくて、子どもたちのためになる、ほんとうに子どもたちの、それで、そこで働く職員モチベーションが上がらないと、子どもも生き生きしてこないんですけど、そういう学校をつくるにはどうしたらいいのかなということを考えて、小中一貫というのがどうなのかなということには自分には一生懸命考えたんです。ちょっと先生方に聞いてみたりもすると、やっぱりすごく多忙化していくというのが不安でたまらないので、一体化のところは別として、離れた学校でどうやってやっていくのか、離れた学校で中学校の先生が小学校へ行って、そんな何も時間ばかりとれないみたいなことで、実際にはどうなってくるかなとすごく先生方も不安感を持ってみえるということはあるんですね。

結構、子どもたちが小学校から中学校へ行くということで、卒業して新しいところへ行くというリセット感というのはとても大事かなと。それが中1ギャップで大変な、何というか、不登校も増えたりということはあるんですけど、表裏一体で新しいところへ行く、新しいことをする、僕のことを知らない先生方でちょっと変わってみようかなみたいなことも確かにあると思うので、そんなことを思うとどうなんだろうと思ったりもするんです。でもいろいろとお話を聞かせてもらおうと、やっぱり先のことをずーっと見通していくと、そのままでは子どもたちはどんどんと減っていくのは目に見えていて、その中でどうやってやっていくのかということを見ると、今、こういうふうにしていくことはやっぱり大事なかなと思ったりもするんです。

説明会のお話、自由意見を見ていると、くっつけたら1,000人規模になってしまって大変みたいなご意見がいっぱいあるんですけど、それについては、私は800人以上の学校にいたので、1,000人も大丈夫というふうに言えるんですけど、かえって、例えば、孤立している子がいたりとかしても、そういう孤立感というのは紛れてしまうというか、たくさんいれば自分に合う子も出てくるし、先生でもやっぱり自分のことを見てくれる先生も出てきたりとか、クラスが複数クラスあれば、それこそやっぱり1年ごとにリセットしていけるというところがあるので、単学級にはないよさというのは絶対あるんです。小さいところは小さいところでほんとうによくその子が見えていいということはあるので、よさはあるんですけど、大きいところにも大きいところのよさは絶対あって、大きいからいじめがあるとか、先生の目が届かないということはそれはもう絶対、どちらかというところと反対かなと思うので、1クラスの人数に対して必要な先生の数というのは、どこでも日本全国変わらないわけですので、なので、たくさんいるだけで、そういう面ではやっぱり小学校、中学校、違う段階の子たちがいるという、いるだけでそこを見て刺激を受ける。下の子がいるから頑張らなきゃみたいなこともあるでしょうし、そこに社会があるだけで学んでいくということは確かにある。

先生方もそうで、私が前に勤めていた学校でも、たくさん人数がいるのでよそから講師の先生を呼んでこなくてもいっぱいいろいろなことを知っている人や、いろいろな技術を持っている人がいる。そこはうちの学校、いいよねと先生方も言ってみえたんですけど、そういう刺激のし合いというのは絶対あるので、大規模、自分も、大規模、嫌だなと思っていたんです、最初、行く前は。だけど、大規模がよくないということは決してないなというふうには思います。

だけど、自分がいた学校についてはどんどん増えてきたので、入れ物が小さいままどんどん増えたので、これ、大変だったんです。新しい校舎をつくらせていただいたりとか、お世話になっているようなんですけれども、そういう面では体育館は絶対2つ欲しいなと思います。三十何学級あったら、回らないんです。そういう施設がきちっとしたものがあれば、子どもたちのモチベーションや先生方のモチベーションも絶対上がるので、いい学校をつくらせていただくと、もう問題の半分ぐらいは解消するのかなみたいなことはちょっと考えています。

【市長】

まさにマンモス校、最後回していただきまして、今、ほんとうにまさに学校の校舎自体も、大山田東小学校は来年の4月に新校舎ができ、やっと一部教室の部分がやっとなくなって、本校舎で勉強できるようになります。その大きな学校を回していただいた安藤委員が大規模校でも孤立することはないよということをいただいたのは非常に重いなというか、さすがだなというふうにわかりました。とはいえ、いろいろリセットすることというんですか、小学校から中学校へ上がるリセットもそうだし、クラスがえという毎年のリセットみたいなこともあるから、そういうのは大事だということであつたり、あと、ちょっと驚いたのは、分離型のほうが忙しくなるんじゃないかと先生はやっぱり思っていたらということ、また、そして、何といっても施設だと、大きいなら大きいなりの施設をつくらないと、それはやっぱりいろいろの問題が出てくるよねということをいただいたのかなというふうに思います。ありがとうございます。

【教育長】

ちょっと1点、修正させてください。

11校がオール単学級と言いましたが、今年は12になりました。

【市長】

12校。

【教育長】

はい。12校がオール単学級です。

それから、学年によって単学級となっているところはほかにも2つありますけど、オールは12です。

【市長】

全体と、全学年が単学級ということですね。

【教育長】

ちょっと修正させてください。11は去年のデータでしたので。

【市長】

12校あるということですね。

大山田東ですら新興住宅地の宅地造成が終われば、そこからは子どもたちの数が急激に減ってきますし、日本中で子どもたちの数が減るわけなので、そういう視点に立った施設設計であり制度設計が必要じゃないかなということかなというふうに思います。

では、次に、佐藤委員、よろしくお願いします。

【佐藤委員】

多度の説明会で全ての方のご意見をお聞きしたわけではありませんけれども、大半の方はやはり小中一貫教育というそのものについては賛成、もしくは、内容がまだはっきりわからないという方で、反対というか、もう少し考えたほうがいいんじゃないかとおっしゃる方もハードの部分でおっしゃられている部分が多いのかなというふうに思っています、そういった点からではソフトとハードというものを別で考える必要があるかなというふうに思っています。中でやっぱり教育委員会としてはあくまでも理想の教育を求めて、その部分、小中一貫教育のよさというものを訴えていく必要があるかなというふうに思っています。

その中で、1つの事例ですけれども、私の息子が通っている大成小学校で、近藤教育長が校長先生だった時代に、教科担任制を一度、試験的にとられまして、私の息子、教えていただいたんですが、非常に評判がよくて、それというのは、社会と理科の授業をそれぞれ持っていただいたんですけれども、やっぱりその先生の持っている強みを生かされた授業で子どもの理解度も増えましたし、また、一方で、担任以外の先生にも自分の息子を見ていただけたという、お互いにというところで、非常に評判がよくて、これ、児童にもそうでしたけれども、親にも評価が高かったというふうに思います。また、あと、先生も負担が非常に少なくなったというお話も聞いています。

もう一つは、これは、低学年と高学年でもやはり指導の方法って大分違うかなというのを感じていま

して、やはり低学年を長く持っていらっしゃる先生もいれば、高学年を長く持っていらっしゃる先生がいて、やはりそれぞれのやっぱり先生の教え方の特徴とか強みというものを生かされた教育をされているなというのを今感じていまして、そういったところから考えると、やっぱり小中一貫教育のよさというものを我々としては感じ取れているんですね、実際に経験して。ですから、そういったことをもっと試験的にでも広めていけば、小中一貫教育のメリットがまだちょっとはっきりわからないという方には知っていただく機会になるんじゃないかなというふうに思います。

【市長】

ありがとうございます。

教育委員としての理想をしっかりと掲げていこうということで大変力強いお言葉をいただきました。

ちなみにその教科担任制は、息子さんが何年生ぐらいのときにやられたんですか。

【佐藤委員】

6年生のときです。

【市長】

6年生のとき。高学年でやっていたわけですね。

【教育長】

そうですね。ちょうど高学年ほど効果があるかなと思いましたが、それで、ちょっと試行のような形でさせていただきました。

【佐藤委員】

そうですね。

【市長】

まさにやろうとしていることをやったわけですね。それは非常に評価が高かった。子どもたちにとっても保護者にとっても先生にとってもよかったということですね。

【佐藤委員】

そうですね。

【市長】

わかりました。このあたりをしっかりと受けとめさせてもらいたいなというふうに思います。

では、松岡委員、よろしくお願いします。

【松岡委員】

私の子どもが小学生や中学生のころ、しばらく前になりますけど、そのときどういう親だったかなというのを思い返しますと、小学校のころは結構、学校行事などにかかわらせてもらったと思うんですね。運動会が大きかったかなと思うんですけど、PTAの係も結構回ってきたりしましたけれども、中学校になるとそういうのがなくて、中学校になったら子どもは預けるものと、よい親ではなかったかもしれないですけど、そんな感じでした。

コミュニティ・スクールの話が出ていますけれども、各学校にコミュニティ・スクールをつくるのかなと思っていたら、中学校区でまとめたのつくり方でもよいというお話になってきていますね。それが何かもしかすると、始まりであるべきだったんじゃないかなと思うんですね。小学校と中学校の校長先生、それから保護者が一緒に話し合いをするわけですね。そうすると、小学校の保護者が将来、子どもが行くであろう中学校の校長先生や保護者と話し合いをして、そういう中で小学校と中学校とこんなふうに連携するといよいよねという話が出てきて、さらに、施設分離型でも小中一貫できるけれども、むしろ同じ施設のほうがかもっとできることがあるよねと、そういうふうな話が出てきて初めて小中一貫教育とか、そういうのがすると非常にスムーズに物事が進むと思うんです。だから、ちょっと順番が反対になってしまったんですね。

なので、できることは、私たちは将来、小中一貫にするとこういうふうに教育効果が上がりますよという、そういうふうなソフト面のメリットを示すのが教育委員会のやることだと思いますし、一方、ハード面も一定のものが必要になりますので、その辺は市長さんを中心にちょっと考えていただかないと

いけないんじゃないかなと、そんなふうに思います。

【市長】

何か教育とコミュニティーが密接に近いものであるがゆえに、順番的にコミュニティーのほうからうまく話し合いができるような空気をつくっていくのが先だったんじゃないかなという指摘は、これ、重いなというふうに思いますね。このあたりはちょっとこの資料4であるのは、学校の話になってくるので、よりコミュニティー単位での、我々も今、まちづくり協議会というものを設置させていただいて、地域のことをしっかりみんなで考える会をつくっていこうということをさせてもらっていますので、その中でもしっかり受けとめて、ちょっと、タイミング、間違えているので、それ、順番がちょっと後先しているのかなという感じも受けますね。ありがとうございます。

この辺を踏まえて、教育長、何かあったら。

【教育長】

今おっしゃっていただいたような、やっぱり確かにこうやっっているんな分野の方が集まっていたかと、いろんな視点があらわれてくるなと思いますので、まさにそれが子どもたちの世界でも繰り広げられるとありがたいなと思っています。今、やっぱり重いなと思ったのは、30年前と変わっていないんじゃないのと言われると、やっぱり反省しないといけない部分が多いなと思っていました。

【稲垣委員】

変わらないことも大事ですけどね。

【教育長】

不易と流行の部分の何をというのを見きわめていかないといけないと思いましたのと、今、佐藤委員がおっしゃっていただいた部分で、やはりハード面とソフト面が混在しちゃうと、非常に説明もしにくいところもあるので、これから地域の皆さんに説明をさせていただくときも、これからの日本の姿というんですか、この人口減少社会の中でどちらかという縮小していく社会ですよ。その中で教育のあり方みたいなものを説明させてもらわないと、ご理解いただくのには、今言ったように、ちょっと難しい部分もあるのかなというのを今聞かせてもらって思いました。ぜひ今後、参考にさせていただきたいと思います。

【市長】

実際、多度の子どもの数を見ていくと結構恐ろしいというか、これ、多度中小学校は、要は、これ、小山台がもう一旦収束しているので、減ってくるんですよ、おそらくこれは。

【教育長】

そういうことですね。

【市長】

こういうを見ますと、そういうのを前提としたものを考えなくちゃいけないのかなというふうに思いますね。でもほんとうに時代もこうやって変わってくるんですよ。

【松香委員】

日本中これですよ、こういうグラフ。

【市長】

そうなんです。もう全部、どこもそうなんです。グローバル化というか考え方もいろいろ多様な人たちといかに議論していくかみたいなのがあって。余談ですけど、うちの娘が今、掛け算の練習をしているんです、小学校2年生で。掛け算を覚えているんですけど、小学8年生という本が今、小学館から出ていまして、昔、小学1年生、小学2年生とか、そういう本があるんですけど、もう今はそれだと売れないので、小学8年生って、デジタルで8と書くと、自分で色を塗ったら、縦に2にもできるし、6にもできるというので、8年生って売っているんですね。この本を見てびっくりしたんですけど、いつの号だか忘れたんですけど、巻頭特集がインド式掛け算を勉強しようとして書いてあって、2桁の掛け算、要は、22掛ける33とか、そういうのを学ぼうみたいなことを、子どもはびっくりしたわけですよ、えっ、私の習っている掛け算と違うみたいな。でもそれがインドでは普通だと言ったら、私も勉強するみたい

になって、何かそういうびっくりすることが学校現場だけではもうおそろくなかなかないので、いろんなところに触れて、社会の人に来てもらう、地域の人に来てもらうとか、そういうことをすることでびっくりしていってもらえないのかなというのはちょっと感じましたね、自分でも。

【教育長】

同じ話を私も大学の先生から聞いたんですけども、日本は九九でやっていたらだめですと。最低でも12掛ける12までやらないと後で使えないし、できたら今、市長が言っていたいただいたインドは22掛ける22までやっている。そうすると、もうすぐにすっとこれが使えるようになるので、もう全然スピードが違うわけですね。

【市長】

いや、ほんとうにびっくりしたんだけど、でも民間の人はそういう発想であるんだなというのを感じながら我々も遅れないように、社会の変化に対応して、子どもたちに教育できるようにしていきたいなというふうに思います。しっかりと、あとは、地域の方としっかりと向き合っていていただいて、教育委員会、私たちのほうもしっかり向き合っていていただいて進めていこうというふうに思いますので、教育委員会事務局のほうもしっかりとやってもらえればなというふうに思います。お願いします。

では、次に、2番のICT教育についてを議題といたします。また、教育長から事務局として今どういうふうに考えているのかというのをお話しいただきたいなというふうに思います。

【教育長】

今日はそれぞれにちょっと資料を用意させていただきましたのでお配りいたします。

<資料配付>

それでは、ICTの教育について説明をさせていただきます。

まず、資料の1、2、3、4と用意させていただいたんですけども、ICTの教育をなぜやるかというのは、当然、世界のことを知っていないといけないということもあるんですけども、やはり子どもたちの学力向上が一番の狙いでございます。それもなれるということと、わかる楽しい授業というのを目指してやってくれるだろうと。これは、松岡委員はもう専門でございますので、松岡委員からいろいろまたお教えいただけたらと思うんですけども。

まず、今のところいろんな先進学校の様子を見ますと、3つぐらいの使い方がありまして、1つ目は、一斉授業で大きく物を映して、みんなが共有できるような、いわゆる黒板と併用型のプレゼン方式のやり方でございます。これは、先生がやったり、それから、児童生徒がやったりということもあるんですけど、そういう使い方が1つあると。

それから、2つ目は、ちょうどこの資料に入れさせてもらったんですけども、これから学ぶ中でアクティブラーニングというお話が今あったんですけども、学び合いというのが非常に大事になってくると。その中でちょうど資料1ですと、台形の面積を学ぶときにいろんな考え方があるので、それで、それぞれに説明し合ひましよう、タブレットがこれについているわけですけども、それで説明をしていくような感じ。資料には、その中で自分の考えと合う子は誰かなと探していくわけです。そうすると、自分の考えと合う子と、それから、考えの違う子と、そうすると、どこが違うかというのをやっばり聞きたくなるもので、そういうような授業の組み合わせをしていくと、お互いの意見の違いとか意見の共有というのがすごく発展するような器具になっているというふうに思います。

それから、3つ目の使い方は、これは、この国語の資料3にも少し関係しているかもしれませんがけれども、資料3というのはちょっと消えていますけれども、そののところと関係するかもしれませんがけれども、特に動画を使いながらやっていく形のものがありまして、やっばり一人一人の子どもが自分に合ったものを教材としていく中で、動画形式とか音声を使ってやるというのがかなり効果的です。今までは、国語ですと、文章を読んで、それで習得していくということですけども、ある子にとっては耳から入るほうがよく入る子もいますし、動画の方がという子もいますので、そういう使い方にはたけたツールじゃないかなと思っております。

それから、ほかの使い方としては、これは家庭学習と関係するかもしれませんがけれども、ドリル型の

ものと、このソフトをうちに持って行って、また使ったりとか、あるいは、繰り返しの勉強をするときに、自分がステップアップしていくための1段階、2段階というのをゲーム感覚でやっていくようなものがありますのと、それと、それをずーっと経過を見ますと、先生のほうから見ると、どこでこの子がつまづいているかというのがわかるようになっていきますので、最初はICTをセッティングするだけで時間を10分、20分と使っちゃって、どうも時間が足りなくなるということがあったんですけども、今は動作も非常に速くなっていますし、今申し上げたようなバリエーションのあるような使い方ができますので、この資料4にありますように、主体的で対話的で深い学びというのに非常にフィットするようなものになってくるんじゃないかなと思います。

ただ、私が思うのは、ただ、このICTだけで完結するのではちょっとだめだなと思っていて、やっぱりそれと、アナログの世界をタイアップしていくと、ここで出たものを実際に体験していくような、バーチャルと現実をつなげるような作業が教師の役目になってくるのかなと思うところがございます。

ただ、子どもたちに刺身はどこからとってくるのというのと、もう刺身は海で泳いでいるという子もいますし、この間、指導課の指導主事に聞いたら、レンゲの花と聞いたら、子どもが中華料理屋さんですかというような話もありましたもので、だからやっぱりバーチャルの時代だけではと思いますけれども、それを併用していくことによって非常に効果があると。

それと、もう一つ、音楽で作曲するときにはものすごく効果があるというふうに聞いていますので、いろいろな使い方がICTにはあるんじゃないかと思います。当然、高価なものですので、費用もかかると思うんですけども、1つの切り口としてはこれからの教育の1つかなと考えているところがございます。

ちょっと提案させていただきました。

【市長】

ありがとうございました。

今、教育長から説明がありましたけれども、ICT教育について、いろいろこれからどういう使い方をしていこうということ、また、このアクティブラーニングに最もヒットしているんじゃないかということ、そして、また、ICTだけじゃなくてアナログもしっかりと結びつけて対応していこうと、そして、お金がかかるよと4つぐらいいただいたなというふうに思いますが、ここを踏まえて、では、松岡委員からお願いします。

【松岡委員】

ICT化率というのは、日本で見ると、なぜか東高西低と言われていています。東日本のほうが進んでいて、西のほうはちょっと遅れていると、どうしてか知りませんが、なので、この辺で右へ倣えしていると、東日本からするとすごく遅れることになりかねませんので、三重大学も西のほうなので遅れているほうなんですけれども、大学のほうでいいですと、来年からは入学生全員にパソコンを持たせるということをやります、既に一部はやっていたんですが。附属小学校・中学校も以前からですけど、各学年1クラス分のタブレットを準備しているということで、結構普通に授業で使って、調べ学習もありますし、理科だと実験でそれをぱしゃっと写真を撮って、後で発表したりとか、ごく普通に使われています。コンピューターを入れるときにも1クラス分入れるのもかなりすごい負担だったと思うんですけども、これはやっぱり文房具ですね。必要なものということで、結構、子どもたちはもう親のスマホをいじったりして、使い方、すぐ慣れるので、普通に使うものということで考えないといけないですね。別に特別なものではないと、学校には普通にあるものという意識で導入していかないといけないんだなということですね。市長さんには非常に厳しい予算の中でどう考えられるかということも難しいと思いますけれども、よろしくをお願いします。

【市長】

文房具と思えというのは、確かに。これ、実際、2020年にはいろんなものがそろっていきやいけないということですね、今のこの、何というんですか、スケジュール的にいうと、そういうことですね。

【教育長】

それこそプログラミング教育と完全に一致するものじゃないですけども、今申し上げたようなタブレットとか、大型の黒板とか、そういうのはやっぱりあるにこしたことはないし、標準装備にして。

【市長】

ないとできないということですね、そういう意味で。

【教育長】

そうですね、そういう指示は来ていますね。

【市長】

ということなんですね。そこに向けてまずしっかりと、いろいろ整備をしていけるようにしなくちゃいけないですね。

【教育長】

よろしくお願ひしたいことですね。

【市長】

しかも西を見ないでといいますか、しっかりと東京を見てといいますか。

【松岡委員】

東京を見て。

【市長】

私も、すごいバーチャルリアリティーのデモを見させてもらったんですけど、もうこんなレベルのことまで子どもたちはしているのかと思うと、もう驚きますね、世界の状況を見ますと。それが入れられるかどうかというのは、なかなかすぐには導入できないかもしれませんが、でもしっかりと桑名の子もたちにもICTの環境整備をしっかりと、文房具と思ってやれるように頑張りたいと思います。

では、佐藤委員、お願いします。

【佐藤委員】

もうICT教育については、必要であるということについてはもう全くそのとおりでございまして、それについては何もありません。やはり環境だと思っていまして、やはりそういった環境を整えられるかという話なんですけれども、さっきのちょっと小中一貫教育のハードの部分とも絡めて、やっぱり一体型の施設とか、統合型にしても、そういった中でこういった環境を整えた設備があれば、またちょっと話も進みやすくなるのかなというふうには思います。

以上です。

【市長】

先ほどの話の続きでといいますか、このICT教育をするのであれば、一貫教育、一体型の小中一貫教育でやるとより深く学べるというようなものを見ていただくというか。

【佐藤委員】

そうですね。

【市長】

ありがとうございます。

では、安藤委員、よろしくお願ひします。

【安藤委員】

ほんとうに子どもたちはもうすぐに慣れていくので、いろんな教科でというか、社会見学とかへ行っても、A4、1枚に自分の見てきたことをまとめましょうというので、いろんなところから写真を持ってきて、大きな字でも張りつけて動いたりするようにしてとかというので、それを全部ずーっとためていくみたいなことをやっていたけれども、ほんとうに子どもたちは環境があればどんどんやっていけるので、あとはもうお金かなというので、ほんとうに何か前回のときにも見せていただいたあれで、桑名市というのは県の中でも環境は飛び抜けて悪いというような感じだったので、どこでどういうふうにお金というか、買っていただけるのかというのを、また皆さんで知恵を出して考えていけるといいなと思います。

【市長】

これ、具体的に幾らぐらいかかるんでしょうね。

【教育長】

言いにくいんですけども、文科省の基準でいきますと、7億5,000万ぐらいかなと。

【市長】

7億5,000万。これは、いろんなものを買い取ってということですか。

【教育長】

そうですね。そのぐらいやね、そのぐらいただったよね。

【安藤委員】

そのぐらいです。

【市長】

そのぐらいかかる。

【安藤委員】

はい。

【市長】

7億5,000万。

【教育長】

いろいろ精査をしながら考えていかなければならないと思っているんですけどね。

【市長】

多分、いろんな手法があると思いますし、リースにするとか、何かいろいろ、先に優先的に子どもたちのまさに2020年から始まる部分だけは優先的に進めるとか、いろいろあると思いますので、そこはしっかりと2020年4月にとにかく迷惑がかからないようにしっかりと環境整備はできる、総務部的に大丈夫、できますと言っていいですか。

【総務部長】

検討して何とかするように。

【市長】

もう僕はすると、じゃ、言い切らせてもらって。

【教育長】

ありがとうございます。

【市長】

いきましょう。買い取りやったら、この額になりますね。

【教育長】

そうですね。また、計画をちょっと総務部と。

【市長】

そうですね、ちょっとそこをしっかりと話していただいて。

じゃ、松香委員、お願いします。

【松香委員】

皆さんのおっしゃるとおりだと思います。もう今、例えば、英語教育について言っても、ほんとうに今、江戸時代なんです。もうほんとうにチョーク、黒板しかなくて、先生も音声のインプットもなくやっていたらっしゃるのがほんとうにいっぱいあるので、でもこの間、皆さんと話をしたときに、近藤教育長さんがそうはいつでも、例えば、学校では、逆説的に言うと、家庭にはない雑巾とかはたきとか、そういうので逆説的に、学校は耐えるところだというのが、もう7億5,000万がないとできないのであれば、もう学校は耐えるところなんだとなると、ほんとうに、反対に、今度、教師がものすごくできないとだめですよ、例えば、英語を1つとっても。教師がものすごくできれば、でも、今の学級担任に英語を教えてくださいとなったら、もうそこら中、間違いだらけですよ、英語も間違いだらけ、発音

も間違いだらけ。こんなことでいいのかなと。江戸時代の人、もう何もなかったですから、音声、何も疑問を感じなかったと思うんですよね、黒板に書いたものを写す。まだ今でもほんとうに日本全国、江戸時代はいっぱいあるので、それをどうやって桑名が脱するかということだと思うんですけど、特区というのは、なるとお金って来るんですか。それとも規制緩和だけですか、特区って。

【市長】

特区でお金がおりにくるのはあるのかな。ICT特区だとあるかな。

【松香委員】

何か、もう英語教育特区とかとしちゃって、それにお金がついてくるなら私も何でもお手伝いします。何か特区にして、わからないんですけど、特区というのは規制緩和だけなのか。

【市長】

おそらく、例えば、ICT特区とかやっているところだと、タブレットを出すのに幾らか国が面倒を見ましょうみたいな部分はあると思いますね。特区の申請をするのに大変なのかな。

【総務部長】

何で特区をとるところですね。

【市長】

英語特区は、何かくれるかな。

【松香委員】

何かお金のくれる方法を考えて、国が出してくれる方法ってあるのかなと思うんですけど。

【市長】

国も進めようとしていることですからね。

【松香委員】

今、皆さんに、小学校、中学校の先生に努力していただいて、9年間カリキュラムってつくったんですね。だから、じゃ、英語特区にするんだと言い張って、それにお金がついてくるなら、私はやりたいですね。でもお金がついてこないんだったらやっても、規制緩和だけだとね。よく知らないんですけど。

【教育長】

教育委員会の中だけでは、特区制度をとると、教育課程が自由にできるという規制緩和なんです。

【市長】

規制緩和だけなんですか。

【教育長】

ええ、中学校3年生でやっていたのを中学校2年生でもできるとか、そういうのはできるんですけども。

【松香委員】

それについてはお金がついてこない。

【教育長】

お金は、スポンサーがやっぱりついてくれるといいんですけどね。あとは、県教委の一応、事業がありますよね、そこに手を挙げるということが我々としてはありますけれども、それは微々たるお金です。

【市長】

あんまり大きくないですね、あれは見ていますとね。

【教育長】

あと、ちょっとこちらのほうで、またあるのかもしれませんがね。

【総務部長】

企業さんとかと一緒に、企業版ふるさと納税とかという形で。

【市長】

なるほど。

【松香委員】

どこかで7億、ふるさと納税も東京都がこの間、盛大に文句を言っていて460億損したとかと言っているから、方向的にはまた見直しも来ると思うんですけど、何かいい方法で7億5,000万円稼ぐ方法はないかなと思うんですけど。もうほんとうにやらざるを得ないんですよ。

【市長】

そういうことだと腹をくくるしかない。

【松香委員】

子どもはほんとうにどんどん進んでいて、家庭に行ったら便利だと、家庭に行ったら、もう暖房もついて冷房もついてコンピューターもあって全部あるけど、学校というのは辛抱するところなんだともう開き直るなら、それはそれで。

【市長】

それもなかなかつらいところで、よくトイレとかエアコンの問題でよくご指摘もいただきますけど、少なくともこのICTの部分といいますか、このお金を何とか確保。

【松香委員】

お金そのものですよ。

【市長】

しっかりと確保していきますので、頑張ってください。確かに江戸時代みたいな部分もありますので、しっかりと時代に合わせてできるようには、少なくともICT頑張ってください。

じゃ、稲垣委員、お願いします。

【稲垣委員】

皆さんと同じで、もうこれはやるしかない、予算、頑張ってくださいというので、ほんとう、いろんなアイデアでお金がみんなで集められればと思います。

あと、もう一つ、ちょっと気になるのは、ああいうものって、さっき楽しさを助長するという、それもあるんですけども、楽しさだけだったら、先生のスキルを磨くとかというほうが全然あると思うんですよ。そうじゃなくて、こういうのって、ただ楽しいだけじゃなく、もっとクリエイティブな視点とか、世界とつながっていくんだとか、そういうものにぜひ発展するような使い方をしていただきたいなというふうにごく思います。こういうのって、特に保護者だと、LINEの問題とか、ネガティブなイメージが実はすごくありますよね。そうじゃなくて、これのよさ、ポジティブなよさも同時に教えるような、何かそういうもの、時間にもぜひしていただきたいなとは思っています。

【市長】

そうですね。だから、単にICTを使えるということじゃなくて、使って何をするかを考える人材をいかに育てるかということなんですよ。

【稲垣委員】

はい。使えるのはもう当たり前、できていますよ、そんな今さら使えるレベルを教えるなんて、教育じゃないと思うので、やっぱり使って何をするかということにやっぱりどれだけ、そこがやっぱり教師の役割だと思いますけど、そういうような工夫をしてもらいたいと。

【市長】

そこを教師が教えるかという大きな問題が実は横たわっているんですよ。そういう意味で、外で頑張っている人のほうが実はうまく伝えられるんじゃないとか、そういうのが出てくるんでしょうね、こういうのは。世界とつながるとか、まさにICTの得意な部分ですからね。ICTといいますか、インターネットの得意な部分ですから。これをポジティブな方向で捉えながら教育を進めていきたいと思いますが、そのための予算をしっかりと頑張って、ほかを削ってここに持ってくるということが1つ。

【稲垣委員】

よろしくお願いします。

【市長】

ありがとうございましたというのも変ですけど、しっかりとやってまいりますので、よろしくお願
いします。

そして、3番目ですけれども、英語教育についてを議題といたします。教育長からまたよろしくお願
いいたします。

【教育長】

これも資料をご用意させていただきましたので、お願いいたします。

＜資料配付＞

では、失礼します。これ、松香委員からもご支援いただくことが多いと思いますので、ちょっと最初
の部分だけということでございますけれども、やはりお話があったように、中学校3年生の姿をどうす
るかというのが非常に大きなものだと義務教育の段階では思っています。当然、高等学校とのつなが
りというものもあると思いますけれども、その中で9年間を通してどう力をつけていくかというのが非常
に大きなものになるかなと思っております。特に、今までは4技能の中の読むとか書く部分はかなり日
本としてはやってきたように思うんですが、特に話す、聞く部分がどうもバランスよくできていないと。
私自身もそうなんですが、使える英語になっていないというところが一番の問題だと思っております。そ
のあたりを桑名では何とかしていきたいということで、今、松香委員に中心になっていただいて、桑名
の英語教育プランということで9年間のカリキュラムというものをつくっていただいていますし、もう
一つは、1つ起爆剤としてということで、桑名スピークフェストということで、特に英語コンテストあ
たりから始めていただくということで、それをちょっと今聞いていますので、非常にしっかり期待をし
たいなと思っております。

それから、音声指導の後でフォニックスを中心にやっていくということになるんですけども、新しい
学習指導要領の中で小学校3年生からやるのと、小学校5年生、小学校6年生、それから、中学校に
なりますので、特に5年生、6年生と、4年生も同じですけども、どこでやるかと、時間がもう満杯
に詰まっちゃっているんですね、6時間以上にやらないといけないというので。それをちょっと今、事
務局のほうでは提案させていただいて、教育委員会のほうでまたもんでいただかないといけないと思
っていますのと、それと、私もちょっと思っていたんですけど、英検が今度、大学入試にも関連してく
るということを聞いているんですけども、桑名で英検を受けれるところってほんとうにないんですよ
ね。そんな意味もあって、民間の試験場とタイアップしながら、どこかの会場で受けれるようにやっ
ていきたいなと、そうすることが裾野を広げることにつながるんじゃないかなと思っております。

それと、資料3・4につきましては、今の続きで申しわけないんですけども、これ、資料3は、
『We can!』という文部科学省が出している教材なんです。それをやるためには、やはり大型の
モニターテレビというんですか、そんなのが必要になってくるし、そういう中で環境整備をしながら今、
これは繰り返しになりますので、できるだけ子どもたちに今の環境の中での英語教育というんですか、
特に音声の問題とか、あるいは、我々が非常に苦手なところですけども、ネイティブに近いというん
ですか、そのあたりとかを実現するためには、環境という部分が必要だろうなということで載せさせて
いただきました。

あとは、ちょっと松香委員からいろいろお聞きしたいなと思っておりますのでございます。

【市長】

ちなみに、資料4のやつは、さっきの7億5,000万に入っているんですか。

【教育長】

そういうことです。

【市長】

これは入っているんですね。

【教育長】

そういうことです。

【市長】

わかりました。

今、教育長のほうから説明がありました。15歳で英語を使える人材を育成しようということで、9年間のプランをつくる、また、スピークフェストの開催をするなどして、15歳で英語が使える子を育てようということ、そのためには幾つか問題もあって、特に時間数の確保が要ということですね。授業以外の部分でも確保しなくちゃいけないというのが出てくるよということ、それから、英検がより大事になってくるので、英検のできる会場を桑名でつくろうということをしよということですね。それから、もう一つは環境が大事だということなので、これは先ほどのICTの部分とつながる部分である、そのようなお話をいただいたところでもあります。

この辺を踏まえまして、まず、松香委員からよろしくお願いします。

【松香委員】

小中英語連絡部会というのを立ち上げていただいて、9年間、小学校1年生から中学校3年生までの聞く、話す、読む、書くで、話すというのが今、2領域になっているんですね、一方的に話すのと、やりとりとなっています。4技能5領域となっていますけど、その表をこんな大きな表をつくって、今、その解説書を全部書いていただいているんですね。それで、それは3月ぐらいにできると思うので、来年からすぐできるわけじゃないんですけど、未来志向のものでですけど、6年間英語を何らか触れたということで中1をやっているの、今の中学校の先生はもう何か想像だにできない世界なんでしょうね。6年間やった子を受けて中1からやるということ、今はゼロ査定みたいな、ゼロから出発するみたいな教科書を実際に教えていらっしゃるの、今、そのすり合わせが大変で、未来志向のものをつくっていただいています。

さっき教育長から、今までは読み書きをやっていたというのは訂正しなくちゃいなくて、読みだけやっていたんですね、日本は。それで、大学入試は95%が読みで、書きは自分の力で書くとか、考えを書くとかエッセーを書くとかというのはなくて、英検協会もすごく苦勞して、全国の高校に調査をかけたら、92%ぐらいの高校で和文を英訳するというのをやっているから、書いたことはないという返答だったので、すごく困って、今、英検は書くところをつくったんですね。それで、急につくったものですから、もうパターンを1つにして、次のことについてあなたの意見を書きなさいといって、2つだけ意見を書けばいいとなって、全部パターンが一緒、もう下から上までかなりパターンを一緒にして、それで、今は英検は受けどきで、スペリングが間違っていようが、文法が間違っていようが、今はチェックしないとなっているので、非常にその部分が満点がとりやすいんですね。今、英検は受けどきです。今が滑り込みセーフ、あと二、三年たったら変わると思うんですけど、今はもうそのトピックから外れていなければほとんど満点という採点方法で、英検協会はそうじゃないとそこを全部無視されて、英検を受ける子が減ってしまうんじゃないかという恐怖から、そういう簡単な方法を編み出したんですね。というぐらい書くことはやっていないです。ゼロに近いです、日本は。自分の力で何かを書くとかということとはほとんど受けていないですね、この国の人は。

それを今からはやっていく、どうにか英検も少しずつ直しながら4技能ということを目指していくというのと、桑名では、そういうさっき特区といったのは、そういう桑名プランというのをつくりましたので、それがそういうものを9年間、CAN—DOというんですけど、子どもたちが何を習ったんじゃないかと、何が今できるようになりましたかというCAN—DO評価というのをつくったんですね。つくったんですけど、そういうのをホームページに張っているような自治体というのは実際にはたくさんあるんですけど、それが絵に描いた餅で動かないので、特に、スピーキングとか人との交流とかコミュニケーションのやりとりの体験をさせるために、イングリッシュ・スピーク・フェストとか、コンテストみたいなのを来年の11月11日に計画しています。

それで、1年間の準備期間をかけて小学校5年生と中学校2年生だけ出場権があって、毎年毎年小学校5年生と中学校2年生がスキット部門と、あと、桑名自慢という2部門がありまして、小学校5年生と中学校2年生が桑名自慢と、あと、2人以上でやるコントみたいなものですね、コントみたいなものと2部門あって、審査員を育て、そういうことをずっとやっていくと、桑名の英語の水準が上がっていく

のが見えてくる。それで、内容はすごく学校の英語教育に沿ったものと考えています。教科書を使ったりしてやっていくと、今までのスピーチコンテストというのは、学校で一番英語のできそうな子を1人選んで特訓して出していくという、そういうものでなく、審査員もどこかわからないけど、何でもいいから、外国人の有名な人とかを呼んできて、その日だけ審査するんじゃないかと、今から審査員の育成というのをやります。それで、それは、例えば、サッカーだったらレフリーというのがいて、それはすごく教育を受けているんですね。だから、これが10年間続くためにまず審査員を育てるというのと、それから、土曜学校というのを開いて、土曜日に11月11日のコンテストに出たい子を鍛えて、そしてやるようなシステムを今考えています。

それで、そこには市民の方に大勢来ていただいて応援していただきたいので、桑名の英語教育が市民の皆さんに見える、保護者にも見ていただけるということで、例えば、今まで英語キャンプとか、いろいろ苦勞していただいている、英語キャンプはいいんですけど、楽しくて、でも誰も見ていないんですね、それを。そこに費用がかかっているの、そういうことより、皆さんが見に来れる、桑名の英語教育って一体、どうなっているのと見に来れるようなチャンスを私はつくったほうがいいなと思って、今、準備中です。

それで、その最終目的は、9年間カリキュラムというものをきちっと具現化する、それを市民に見せる、それで、また応援していただく。それと、もう一つは、今、ブランド推進課のほうにお願いしているんですけど、それを応援するためにいろんな姉妹都市をつくったらいいんじゃないかと、そういう同業種の方、地域でいろんなところに外国から桑名に泊まりに来てもらって、そして、子どもたちが案内するとか、市民の人が案内するとか、そういう応援部隊もつくっていかうかなと思っています。何せ桑名の子って、何かやらせようと思うけど、英語なんかしゃべらないもんと、外人なんかいないもんと、いうふうに決まっているので、その周辺も固めていきたいな、絶対に必要なだよと、しゃべったら絶対に必要というか、しゃべれたら楽しいよねということを経験させたい、多くの子に。それで、それを小学校5年生と中学校2年生だけやって、毎年毎年そこを目指させていきたいかなというようなことを考えて、今、大プロジェクトを進めております。市長さんにもご説明して応援してくださるというスタンスだったので、大変うれしく思っています。

【市長】

9年カリキュラムの形にしてみせる場所として、そういうスピークフェストを今、11月11日と日程まで今。

【松香委員】

仮ですけど。

【市長】

選挙中かもしれないですけどね、市議会議員の選挙中の可能性も、その辺、ちょっといろいろ考えながら。

【松香委員】

選挙になったらできないんですか、そういうのは。子どもは関係ないですよ。

【市長】

子どもは、親御さんとかいろいろ。

【松香委員】

選挙に行ってからスピークフェストを見に来てくれれば。

【市長】

例えば、そういうのもいろいろ。

【松香委員】

もう日にちはそこしか、もう決めましたので、そこしかやりません。11月11日です。1、1、1、1。

【市長】

選管にも伝えて。

市民の方にも見てもらって、桑名の英語教育、こんなに進んでいるんだと確認してもらえるところとしてやっていくのが大事だというふうに思いますし、やっぱりこういうことがなかなかやりたくてもできていなかった部分もありますので、しっかりと、いろいろ松香委員からいろいろ旗を振っていただきながら、我々もしっかりと、教育委員会だけではなくて、我々の市長部局のほうでも、このジュニアサミットのレガシーといいますか、そこはやはり私はこのグローバル教育というか、グローバルな社会を体験したということが大きなレガシーになると思うので、しっかり英語教育の部分に残していきたいなと思います。

【松香委員】

そうですね。ジュニアサミットでしっかり畑を耕していただいたので、その集大成として何かそういうような学校教育とタイアップしたような、従来のスピーチコンテストにはないようなものができたら、ほんとうに特区になってもいいなぐらい思っています。それで、それを認められたら、どこかからお金が降ってくるともったいいなと思っているんですけど、そういうことがあればもうどっちにしろICTも必要だし、ALTも必要だしいろいろな応援は必要ですけど、大きな意味は子どもたちに未来に対して希望を持たせたいと思っています。

【市長】

英語教育の場所だけじゃなくて、何か産業界だとか、いろんなところでグローバル化しているよみたいなことがより見えてくると、子どもたちもより英語に対しての熱意も出てくるでしょうし、そういうのが桑名全体で沸き上がってくると、英語教育特区じゃなくて、英語特区みたいなものになるんですかね、全体でやるみたいなことだと、文科省じゃなくて、対内閣府で何かできたりとか、そういうことも出てくるかもしれませんので、そのあたり、ちょっとまた我々もいろいろ知恵を出しながら、どういうのができるのか一回考えていきたいなというふうに思います。

【松香委員】

それで、来年の6月にもちょっとセットしまして、オーストラリアから3夫婦が来ます。それで、ほんとうに桑名でどこのお寺に泊めていただいて、1週間修行ができるかとか、そういうのをそれまでに、どこに行ったら折り紙を一緒につくって、どこのうちでホームステイさせていただいてというのをもう来年6月に3夫婦見に来てくれることになっているので、桑名をよく見ていただいて、どういう人なら来て、1週間とか桑名に泊まって、たくさんお金も落とさせていただいて、交流もさせていただけるかというのを具体的に進めようとしています。

【市長】

今日も午前中、ブランド推進委員会があって、誰をターゲットにやっていくんだと結構いろいろありましたので、そういうのもインバウンドというか、海外からのお客さんという視点も踏まえて、しっかりと学んでいこうと思います。

では、稲垣委員からいきましょうか。お願いします。

【稲垣委員】

いや、もういいなと思いました、今のお話で。夢がありますよね。

【松香委員】

ありがとうございます。応援してください。

【稲垣委員】

応援します。

そういう意味で、ほんとう英語特区で予算をぜひトップ営業して持ってきていただけると。

【松香委員】

盛り上がりますね、英語特区で。

【稲垣委員】

そうですね、英語特区というのもいい響きだなと。

【市長】

広報くわなを英語で出すとか。

【稲垣委員】

そのぐらいです。

【市長】

わかりました。ありがとうございます。

では、安藤委員、お願いします。

【安藤委員】

私も夢だけではなくて、ほんとうに言ってみえたことが着実に進んでみえるので、すごいなと思って聞かせていただきました。

【松香委員】

すごく進んでいます。もう後戻りはできない。

【安藤委員】

すばらしい。

以上です。

【市長】

じゃ、佐藤委員、お願いします。

【佐藤委員】

ほんとうにお聞きしておりまして、夢の持てる話でありまして、9年たった後にこういうコミュニケーション力が培っているなというのが想像できるような内容だと思います。さらに言えば、このコミュニケーション力を使って世界で活躍するなりして、最終的には私が思うのは、やっぱり日本のよさを改めてわかる機会になるかなというふうに思います。それがやっぱり最終的な可能性とするところかなと思いますね。

以上です。

【松香委員】

まずは桑名自慢というのをやって、ちょっと四日市を打倒してみたいと思って、その後、日本のよさにつながりますから、四日市も何か四日市自慢というのをやっているらしいので。

【市長】

そうなんですか。

【松香委員】

そうです。何か英語でやっているらしいので、そこをちょっと打倒してみて、桑名のほうがずっといいねとまず、ちょっとちっちゃく一回は張ります。その次、日本のいいなというのが出てくると思います。それに、来年来てくれるのは、最初来てくれるのはオーストラリア人なんですけど、でも中国人も韓国人も台湾人もいいかなと思っています。松岡先生のところに留学生が中国からたくさん来ていますとおっしゃったので、お借りしてどうにか。

【佐藤委員】

留学生にとってもいい機会になりますよね。

【松香委員】

よろしくお願いします。

【市長】

先日、私、佐藤委員の会社にお邪魔して本物力博覧会というのを体験してきたんですけど、ものすごい大きいタンクにしょうゆが入っていて、1,000リットルだったかな、1,000リットルでしたっけ。子どもたちもこれは何ですかと、これはアメリカにたまりじょうゆを持っていつているんですと。たまりじょうゆというのは小麦を使わないので、グルテンフリーということで、今、海外では、何症でしたっけ。

【佐藤委員】

セリアック病という。

【市長】

セリアック病、小麦を食べると病気になってしまう。テニスのジョコビッチとか。

【松香委員】

アレルギーが強いんですよね、小麦はね。

【市長】

そういうのを対応できるのが実はたまりじょうゆだということで、グルテンフリーたまりソースとどこかでかく書いてありまして、子どもたちも喜んで覚えていましたので、まさに企業もグローバル化、おみそ、しょうゆをつくっていただいている、創業243年でしたっけ。

【佐藤委員】

210年ぐらいですね。

【市長】

210年の企業さんも老舗といいながらやっぱり世界と向き合っているんだという、こういうことも子どもたちがわかってきてくれると、また桑名で英語教育を学んで地元でここで働いて、かつ、グローバルな、専門をしながら仕事をすると子供が増えてくるとすばらしいことだなといつも思っています。

では、松岡委員、お願いします。

【松岡委員】

英語については、使える英語、発信できる英語に持っていくというのは大事なんですけど、試験の話が出たのでちょっと説明しますと、国立大学協会では平成33年から共通テストと、それから民間の試験の成績と併用するというふうに決まりました。三重大学も平成33年から導入します。平成33年に入ってくる入学生というのは、今度高校1年生になるんです。それから、平成37年には100%になります。共通テストの英語はなしにして、民間試験の成績でやります。それは、今度小学校6年生からそういうことになりますね。そういうことで、高校からの問い合わせがたくさん来るんですけども、高校の教育に反映しようということですけども、高校3年でできることもありますけれども、望ましくはもっと早い段階からやるということです。それが間に合うのか、大学から見ても非常に心配で、教育長から話がありましたけれども、英検、桑名市内ではとかお話がありますよね。そういうふうに中学生とかが手軽に民間試験を受けられるような体制に持っていけないといけないし、学校の教育の中でも受けようねと、そういうふうに持っていけないと、先々不利な形になってしまうということになるのかなと思います。その辺を進めていけないといけないんですけども、松香委員をお迎えして、活動等を展開していってほしいんですけども、それは市長さんの非常にいいご判断でかなりというふうに思いますので、ぜひ展開して。

【松香委員】

そうですね。9年間カリキュラムの中に英検の内容も入れていますので、英検も受かっていくというのも、あと、教科書もやる、そういうふうになっています。

【松岡委員】

一応、ちょっと説明しておきますと、大学としては認定試験という言い方をしています。

【松香委員】

英検とは言わないんですよね。

【松岡委員】

英検だけではなくて、GTECとかTOEFLとかありまして、それでいろいろ調べて認めるものについての試験ということになりますので、英検だけではないんですけども、そういった試験が受けられるような、桑名で手軽に受けられるふうにも持っていっていただきたいですし、教育の中でもそれを取り入れていただきたいというふうに思っています。

【松香委員】

その対応ってすごく大事というか、英検さんのご説明によると、学校で習った、教科書で習ったことは60%、検定である以上、見たこともないものに闘うのが40%とおっしゃるんですね。だから、もうち

よっとそういう力をつけなきゃいけない。学校でやったのは中間・期末テストで試すわけですよ。でも英検というのは検定ですから、見たことないものにも闘えなきゃいけないということが40%なんだそうです。だから、そういう力をつけていかなきゃいけないので、それも今、取り込んでいます。

【市長】

教育長がおっしゃった英検をできる場所をつくろうというのは、具体的に場所があればいいんですか。何かどういうものなんですか。

【教育長】

ちょっと問い合わせをさせていただいたら、個人負担もあるんですけども、団体でやるとかなり安くなると、かなりというか少し安くなるというのと。

【市長】

そういう意味での受けやすさということ。

【教育長】

それと、検定会場については、会場だけ、例えば、市役所なら市役所でも結構ですし、例えば、光風中学校でもいいんですけども、そういうところだけ提供してもらったら、ほかの動員ができるというような形も聞いていますし、最初の段階は、JTE等、うちはみえますので、そういう人たちを中心に展開できるんじゃないかなと。当然、その校長先生のあたりはご理解を当然いただかないといけないですけども、そんなことで進められるのではないかなとは思っております。

【松香委員】

でも財政のことをいえば、中学3年生に1回だけは受験の費用を保障するという県がどんどん増えているので、そういうまたお金が。

【市長】

もう、そういう自治体が出ているんですか、なるほど。中学校3年生で。

【松香委員】

機会均等ということになると、いつかはそこをやらなきゃいけないくて、もう既にやっている県はかなりあります。1回でいいから保障する。

【教育長】

これも東高西低ですか。東京のほうがやっぱり多いですか。そうでもない。

【松香委員】

いや、日本海側ですね。秋田、山形、富山、福井とか、そこら辺はざっと県で保障しています。

【市長】

県で保障する。

【松香委員】

もう学力大好きなこっちのほうは。

【教育長】

ちょっと県教委にも言ってみます。話をしてきます。

【松香委員】

そうそう、県で保障してあげてください。1回だけですね、中学校3年生が1回だけ、無料で受けられる。

【市長】

県にしっかりとっていただいて。

【松香委員】

お金の話ばかりだった、次々。

【市長】

やっぱり大事なことです。やっぱり試験も大事ですから。

それでは、次に、事項書の4、コミュニティ・スクールについてを議題といたします。教育長からま

たお考えをお示しただけならばというふうに思っています。

【教育長】

これも資料をお配りさせていただきます。

＜資料配付＞

これは、先ほどの小中一貫教育についてご議論いただいた中でも少し触れていただいて、特に松岡委員からちょっと小中一貫教育の関係等もおっしゃっていただいたんですけれども、とても小中一貫教育とコミュニティ・スクールというのは非常に表裏一体の関係にあるのかなという気がしております。ただ、今、ちょっと課題となるのは、学校評議員制度についてもある意味の学校運営協議会のはしりについても、今は、小学校区単位で大体やっているんですね。それが中学校区とどういうふうにつながっていくのかなということを思っています。

これ、資料1については、文科省が出しているリーフレットから持ってきたんですけれども、校長先生と、それからコミュニティ・スクールのつながり、あるいは、保護者の方か地域住民の方々とのつながりというのをこの図で示しているんですけれども、よく言っておりますのは、熟議協働マネジメントという言い方をされていまして、しっかりと議論をしてその決めたことはみんなでやりましょう。ただ、そのときには、PDCAサイクルじゃないですけど、マネジメントをする人が必要なんですよねというところがありまして、ちょっと教育委員会の中でも少し議論があったんですけれども、校長先生がマネジメントをしたら、やっぱりそんなに発展的にならないし、今の学校評議員の方々も意見は言うんですけれども、それがそのまま学校運営に反映するにはちょっと時間がかかったり、時には、それはあまり取り入れられないということもありますので、せつかくコミュニティ・スクールになるんだったら、やっぱり一定の権限が必要だというふうには思うわけでございますので、桑名でやる場合は、ぜひそのあたりを考えていかなくちゃいけないんじゃないかと。

これもちょっと議論があったんですけれども、それでもいわゆるこのコミュニティ・スクールの委員さんとか理事さんとかという言い方をするんですけれども、その人たちが10人なり15人いたとしても、誰が、じゃ、その旗振りをするのか、校長先生と対峙できるのはどうなんだというところが、これから非常に大きな問題になってくるんだろうなと思っております。それは、大体、先進的にやっていたところを見ると、やはり理事長さんみたいなのがみえるんです、コミュニティ・スクールのコーディネーターという言い方をされるところもありますけれども、その方が校長先生と同じぐらいの権限を持っていて、それで、みんなで決めたらどうかというときにも大きな影響力があると。大体、その人がどういうふうになっているかなという、これ、佐藤委員とも少し話していたんですけれども、PTAの会長さんとか役員をされた方がそのままなっていくというケースがあって、そうですと、校長先生も長い期間やっている人もみえるんですね。だから、やっぱりPTAの方々も母体になったり、あるいは、今まで学識経験者とか、自治会の方々も入っていただいているので、そういう方々の中にも適切な人がみえたら入っていただくというんですけれども、ある程度の権限を持った人が必要じゃないかなというふうに思っております。

そんな中で桑名市としてどういうふうにしていけばいいのかなというのをかなり事務局の中でも議論していたんですけれども、そうすると、やっぱりこれもちょっと俗っぽい言い方で申しわけないですけども、お金が、予算とか人事権がやっぱり必要になってきますよねと。ただ、人事権は、この先生、ちょっともう外へ行ってくださいとか、この先生、欲しいんですとかというようになると、ちょっといろいろな問題が出てきますので、予算の面である程度のものでできるようになるといいんじゃないかと。

下の資料2でございますけれども、これについては、現在、桑名市の場合は魅力ある学校づくりというので、それぞれの学校に児童生徒数を中心にしながら何がしかのお金をお渡ししているんです。それで学校運営をやっているんですけれども、それと、もう一つ、確かな学力とか、指導力向上とか、生徒指導、学力向上というような形で、小学校や中学校に講師の人を配置しているんですけれども、これを校長先生からお聞きして配置をさせていただいているんですけれども、その部分の予算をある程度、コミュニティ・スクールにある程度お渡ししたらどうかと。その中で、うちは英語をやっている

くんです、うちはICTをやっていくくんですとか、人権やっていくくんですとかいろいろあるので、それに見合うような講師の人をコミュニティ・スクールの中で雇って、あるいは、Q-Uをやっている生徒指導上の問題もちょっとあるのでというんだ

ったら、そこで使えるようなものとか、それから、もうちょっと先生たちに授業を見てもらわないとならないというんだったらそれに使うとか、それから、子どもたちの中に、やっぱり実物の体験をさせないといけないので、いろんな民間の人たちを寄せないといけないとなれば、そこにお金を使うとかというのを、コミュニティ・スクールで決めてもらおうと。そうすると、かなり自分たちの中で責任と権限とかが出てくるような気がしますので、そんな形を今後つくっていけないかと。これは平成31年以降というのは、次の学習指導要領に合わせて1年ぐらい前に前倒しをしながらそんな方向に持っていけないかなということで、今ある予算を効率よく上手に使っていくという側面も含めて資料2というふうにさせていただいた次第でございますので、そんなことも含めてちょっとご意見をいただきながら、コミュニティ・スクールの桑名版のあり方を少しご示唆いただくとありがたいなと思っています。

【市長】

では、今、説明がありましたコミュニティ・スクール、どういうものかということで、もうちょっと権限を持たせて予算もみたいなこともありましたけれども、このコミュニティ・スクールについて皆さんのご意見を伺いたいというふうに思います。

じゃ、安藤委員からいきますか。お願いします。

【安藤委員】

職員の負担感の話ばかりして申しわけないんですけど、やっぱり時期的にも小中一貫教育の話、コミュニティ・スクールの話があって、指導要領の改訂の話が出ということで、あれもこれもという感覚がすごくやっぱり職員の方々には多いと思うんです、先生方には、特に校長先生なんかもそうですし。なので、今、市長が言われたようなある程度権限を持ったコーディネーターをととか、予算や人事権もというのもおおいという感じで、自分だったら、自分が校長だったら前々回の教育委員会のときぐらいにお話をいただいた学校応援団を、先生が全部動いているのは大変だから、地域の名士の方とか、要は、学区の自治会長とかに来てもらって、これならこの人がよく知っているのを連れてくるわとかという、そういうような役目をさせていただく、コーディネーターをさせていただくとか、そういうようなことではないんですよみたいなふうに最初話を聞いたので、そういうようなことだったら今の発展で、もっと学校も開いていき、人材も絶対みえるので開拓をしていきというようなことでやっていけるといいんだろうなというふうに思います。なので、それは何というか、考え方を改めてぱっとというのはあるんですけど、あれもこれもというのはなかなか難しいので徐々にという感じかなとも思います。

【市長】

今、教育の分野とまた別のところで、地域コミュニティーをどうするみたいな議論をずっとさせていただいてまして、今まで行政も縦割りなので、地域も縦割りになっているんですよ。自治会の人とかPTAの人とか、また自主防災の人と消防団の人とか、自主防災対消防団でけんかしているみたいな全く無駄な闘いが地域の中であつたりするんですけど、でもこれも一緒に、みんな同じ方向を見て、同じ地域の課題を共有してやっぺいこうみたいな地域にしていこうということで、今、まちづくり協議会というのをそれぞれの地域でみんな一緒になって課題解決する仕組みをつくらうということを行っているんですけど、そういうような流れもひとつこれは何か考えていけないでしょうね。今のを伺っていると、いきなりこんな権限をととか、人事権をとかとなると、もう何か私にはできませんよみたいなことも起きかねないのかなという気はしますね。方向性はよく、地域と連携するのはよくわかるので、おおい、実際回してこられた先生としてそういうふうを考えるんじゃないかみたいなご指摘だったと思いますので、しっかりと受けとめていきたいというふうに思います。

では、佐藤委員、いきましようか。

【佐藤委員】

このコミュニティ・スクールの仕組みそのものは非常にいいものだというふうに思っています。実際、

ある地域ではこういった形で、名前は違うものの育成会とかという形で地域によっては残っているものもありまして、そういった面ではいろんな地元とともに一緒にお祭りをしたりとか、イベントをしたりということもあるので、そういった形では非常に地域を挙げての教育に取り組むという形ではいいと思います。

一方で、やっぱり現状からの課題としては、先ほど権限の話もありましたけれども、育成会等々で決めたこととか、いろんな出た意見が、じゃ、どう学校に反映されるのかというのが委員のメンバーとしては、やっぱり気になるところで、そういう意味では、ある程度の何か権限ではないですけども、意見を申す形ができればいいかなというふうに思っています。

あと、文部科学省のコミュニティ・スクールをつくったときのメリットというところに、保護者全員が参加して学校に関与できるというふうになるとありましたけど、現状でも非常にPTAでも協力的な方もいれば、そうでない方もいらっちゃって、そういった中でこういう仕組みになったときに、じゃ、果たしてほんとうに全員がそういう方向に進むのかという課題は残っていると思いますけれども、いずれにしてもこういう形として進み出すということについては、非常にいい考え方だと思います。

以上です。

【市長】

ありがとうございます。

これは、コミュニティ・スクール用の部屋とかの設置、おそらくこれだと。

【教育長】

多くのところでは、地域交流センターといって、そんな形の名前でそこで会議をするようなところをつくっているようですね。今、安藤委員が言われたように、もう即座にやっていくとなると大変かなと思いますので、徐々にということはあるんですけども、幾つか先進的にやっているところはありますので。

【市長】

佐藤委員のおっしゃったように、多分仕組みはみんなよくいいよねと言いながら、今のPTAの方たちの濃淡といいますか、見てみると、どうなっていくのかというのは1つ懸念かなというふうに思いますよね。ありがとうございます。

では、松岡委員、よろしくお願いします。

【松岡委員】

何々学校運営協議会というのは、当初は各小学校、あるいは各中学校でつくりましょうかという話だったんですけど、それが中学校区単位でもいいという話になって、桑名は小中一貫の話をしているので、中学校区でまた連絡協議会をつくと、最初に申し上げたような形で小中一貫の話もできますし、私のような親でも中学校に行っても多少学校にかかわろうかなというふうになっていくかなというようなことを思ったんですけども。

一方、ちょっと私、わからなくなりましたんですけど、そうすると、小学校単位の活動やかかわりがちょっとしぼんでしまわないかなという懸念、それをどんなふうを持っていったらいいのかなというのが私の中ではちょっとよく見えていない、そういう感じですね。

【市長】

これは、教育長、どうなんですか。

【教育長】

今、松岡委員がおっしゃったところは、これからの過渡期になると思うんですよね。まずは、やっぱりそれぞれの学校でコミュニティ・スクールという形にはなると思うんですよ。例えば、光風のコミュニティ・スクールができたなら、光風中学校と修徳小学校、あるいは大成小学校とか立教小学校のコミュニティ・スクールがあるのがちょっと拡大委員会みたいな形になってくるかなと思うんです。その中にやっぱり中学校区の学校運営協議会、コミュニティ・スクールがあって、その各部会というんですか、そんなのが出てくるのかなと思うんですが、特に、今は桑名市全体が自治会さんと連携しなきゃならな

い、小学校区をもとにいろんな活動をしていますので、それを一気に中学校区で見ていくんだというのは少し難しいので、今のまちづくりの協議会と並行しながら、その教育部門みたいな形で中学校に広げていくようなちょっとした期間は必要かなと思いますよね。だから、でき上がった中にもある程度の小学校区会みたいなのがやっぱり必要かなとは思いますがね。

【松岡委員】

ちょっと桑名、いろいろな形の小学校と中学校のかかわりがありますよね。小学校でも分散して中学校に進むとか、それぞれに応じたちょっとありようを考えていかないといけないかなと。

【市長】

そこは難しいところですね。

【教育長】

なかなか分散進学と我々言っているんですけども、2つに分かれているところは7つありますので、そこについてはやっぱり中学校単位でやっていただく中のそれぞれ小学校部門というのをまずはつくっていくべきだろうなと思いますけどね。なかなかこれからの大きな課題になるところです。

【市長】

ちょっと個人的に、多度はどうなっていますか、これ。多度もそうしていくんですかね、これは。

【教育長】

多度に特化してといういろいろ難しいところはあるんですけども、多度の場合は、今、校長先生方とか、職員の方々のレベルでは、多度地区でずっと協議会をつくっていただいているんです。それぞれ、多度の場合は、小学校区にPTAさんがあって、学校評議員という形で今、活動してもらっていますよね。だから、それを全体で見えていこうかと、多度中学校区の拡大委員会にしますというような形に切りかえていってもらえることはできると思うんですが、これからまず、校長さんたちと職員の人たちとの母体をまず築いてから、そっちへ行こうというような考え方で今、進めていただいているところでございます。

【市長】

じゃ、次、松香委員、お願いします。

【松香委員】

私は権限の問題はすごく大事だと思っていて、どうしてかという、PTAというのは、ペアレント・ティーチャー・アソシエーションですよ。それで、今、どうにかPTCみたいになっている、それにコミュニティーをつけましょうみたいになっているんですけど、そうすると、日本的考えでは、親は人質にとられているから何も言えないとか、地域の人もお邪魔しちゃいけないみたいになると、そういうところに行って、何も生まないんですね。皆さん、穏やかに集まって、いいですねとって、校長先生だけが何か発言してというのでは、社会は全然変わらないかなと私は思っていて、今、会社が問題を起こすと第三者委員会とかとって、何か全然違う人をあれて、何か勧告しますよね。あれは悪いことをしたらそうなるんですけど、そうじゃなくて、いいほうにある程度権限のある何か組織体が今年度中にこれとこれだけは、学校の、じゃ、わかりませんが、トイレを、じゃ、直しますといたら、何月何日までにそれは必ずやってくださいねと何か答申かなんか出せるような、何か実行性のあることをやっていかない限り、みんなが遠慮し合って、結局、校長先生、学校が一番上で、ティーチャーが上で、次にペアレントは何も言えなくて、地域の人はお役に立てばみたいな、すごく腰の低い感じでやる会議っていっぱいありますよね。何も進まないと思うので、どこかその権限のあるような、悪いことをしたら何か全部今、全部従うわけですよ、あれね、何か査察とか入っちゃった、そうじゃなくて、そのいい版をつくって、全部一遍にはできないと思いますけど、何か少しずつそのような社会になっていかなきゃいけないかなとすごく私は思っています。

【市長】

教育者の中で学校でそこで何か実際に教育部門、学校の学校部門とこちらのコミュニティ・スクール部門に分けるんですかね。我々で予算をつけるのがどうやってつけるのかとか、例えば、その辺もちよ

っと考え方をしっかりしていかなくちやいけないですね、これはね。

【教育長】

だから、学校の中の中身については、そんなにしゃべっているようでしゃべっていないんですね、校長先生。今、よく文部科学省が言っているのは、社会に開かれた教育課程と言っているんですけども、今の英語なら英語に、市民の方に見せましょうという松香委員がおっしゃっていたけれども、学校もできるだけわかりやすい表にして、見せていって、その中でどこがやっぱり足りないのかと、そのためにここへお金を使うんですけど、どうですというような意見を言っていたら、そこを重点的に、じゃ、やりましょうと、そのために話し合うことを決めたらみんなで一緒にやろうねというような雰囲気ができる、非常にこのコミュニティ・スクールは機能的になるんじゃないかと思うんですよね。

【松香委員】

今、校長先生って自由に使えるお金はあるんですか。

【安藤委員】

教育長のほうから話があった20万か30万ぐらい。

【松香委員】

20万から30万。

【安藤委員】

はい。魅力ある学校づくりということでいただいています。

【松香委員】

そういうのを権限の持っている人が、もうあと1桁ぐらいあるといいですけど、でも何かみんなで考えて、これは専決事項とかあるといいなと思う、進むと思うんですけど、普通、市民の立場でそういう会議に呼ばれたこともありますけど、ほんとうにもう何も言うてはいけない、もう市民というのは、もう子どもたちが安全に学校に行くように見守るとか、そういう程度に抑えられていて、物を言うなんてそんなという社会ですよね。ですので、校長先生が幾らお金を持っているかも知らないし、すごくオープンじゃないですよね。

【市長】

桑名の教育委員会はどんなことでも言っていたらいいような委員会に大分変わってきていますから、これが学校現場でも見られるように。

【教育長】

ありがとうございます。こういうスタイルが一番いいと思いますね。

【市長】

確かに、しっかりと受けとめていきたいというふうに思います。実行性のあるものにするための権限ですね。

じゃ、稲垣委員、お願いします。

【稲垣委員】

多分、いわゆるぎなぎないくんだりうなという気が正直しちゃうんですけども、何でぎなぎないなっちゃうかというところ。

【松香委員】

ぎなぎなって何ですか。

【稲垣委員】

ぎなぎなというのは、三重弁で私もよく、まあまあ、まあまあ。

【松香委員】

ぎなぎなと言うんですか。

【安藤委員】

徐々に、積極的ではなく。

【稲垣委員】

徐々にいく感じで。じゃ、協議会、もし私が選ばれて参加しても、やっぱり何に向かって話したらいいのかわからない。壁、直してください、いや、予算がとか何か、すごい目先の小さいことを話しちゃいますよね。そうすると、やっぱり協議会がほんとうに機能すると考えると、やはり、ある程度、どこかに向かってやるんだとなると、もう平成33年とかとある程度期限が決まっている国の制度であれば、私は、この中学校区を1つとしてコミュニティ・スクールができて上がるというのを何か目指してやっていく必要ってすごくあって、それってまちづくりの話にもなってきますよね。どういう中学校区でやっていくのか、そうすると、ほんとうにこの中学校区をどうしたらよくなるだろうというところで話せるような土壌ができてきたときに初めて、そこで権限移譲とか自分たちの参加の意欲だったり、責任というのが出てくるんじゃないかなと思うんですよね。そういうちょっとすごくハードルが高い感じがするので、それまでは何かぎなぎなく感じが、なので、でもぎなぎなくってまた3年ぐらいにこういうところが明確になったときに、この間、3年前も話しただろうみたいな、そういうのはもうやめたいと思うので、ある程度ちょっとつらいけど、やっぱり中学校区、今の段階から、どういう中学校区にしていく、どういう未来のまちにしていく、そこから落としていくみたいなコミュニティ・スクールをぜひやっていただきたいなと思っています。

【松香委員】

ぎなぎなにならないようにと使うんですか。

【市長】

そういう使い方ですね。

【松香委員】

ぎなぎなにならないように。

【稲垣委員】

じゃ、実際に権限、いきなり責任を持つのは難しいので、ぎなぎなにはなるんですけど。

【松香委員】

ぎなぎなになる。

【市長】

ぎなぎなやりましょうと。

【安藤委員】

そうですね、ぎなぎなやっていく。

【松香委員】

ぎなぎなやると、何も起こらないということですか。

【市長】

ぎなぎなやると、徐々に徐々にみんなと仲よくやりながらやっていこうとって。

【松香委員】

何か起こるんですか。一応、起こるんですか。

【安藤委員】

わりと起こりにくいですね。

【松香委員】

起こりにくいんですよね。

【安藤委員】

これはないとは限らないですけど。

【市長】

そんな焦らんとぎなぎなやろうということを言われますね、私もいろんなところで。

【教育長】

ただ、国はこれでもう34年4月には設置せよというようなことを法律で決めてくるんですよね。そのあたりがなかなか難しいので、それでもぎなぎなになると思うんですけども、そのあたりが国はわ

りと旗を振るのが最近多いので。だから、小中一貫も新しい教育課程の中に組み入れると言われるんだけど、全部国が後ろでやっているところがあるので、ただそれにやっぱり先生たちが踊らされてはいけないので、ほんとうに子どもたちをどうするかというところに議論を持っていかないといけないですけどね。だから、ある手法としてぎなぎなも大事なところもあるかもしれませんけれども。

【市長】

ちょっと先週、まさに地域コミュニティーのシンポジウムをさせていただいて、島根県の雲南市の方にお越しをいただいて、もう20年前から地域でいろんな活動をするみたいなことをされている方がおられましたけど、何かやっぱりその方はその地域をどんなまちにするのかみたいなビジョンを自分たちでつくったと、2年間で150回会議をして、自分たちのまちをこんなまちにしようというビジョンをみんなで作ったと話していましたが、何か、だけどそういうのが先にある日に言ってもらったみたいに、そういうのがないと、単に集まって学校の先生の話聞いて、いや、いい会でした、なかなかいいことを聞きましたみたいな、何か変わるのかみたいなことになりがちですよ、それじゃね。ただ、そういう意味では、どんな学校にするのか、また、どんな地域にするのかみたいなものを何かどこかで議論する場所が先にないと難しい部分があるのかもしれないですね。ありがとうございます。

【松香委員】

近藤教育長が60回会議されたというから、まだ足りなかったんですね、あと150まで90回。

【市長】

それも地域の方だけでやっているんですよ。職員なんか全くいない中で、地域の人がこんな分厚い。

【松香委員】

地域の人だけで。

【市長】

ええ。自分たちのビジョンをつくったという、信じられないすごいことをされてましたね。名張か、それは、名張の方でした。桔梗が丘という新興住宅地をどんな地域にするのかということをおみんなで議論して、こんな分厚い本をつくったんですよと言っていましたけど。その教育版というか、そういう何か一緒の同じことをいろんなところでやっても大変なので、結局全体の、この地域はこんな理想、未来予想図を描くから学校現場ではこういうふうな学校になったらいいよねというようなことになっていくのが一番いいんでしょうね。

ありがとうございます。貴重なご審議ありがとうございます。何か言い足りないことがありましたら。もう大丈夫ですか。

ありがとうございます。じゃ、これで本日の事項は終わりということになります。

では、事務局から連絡事項、何かありましたら、お願いします。

【総務課長】

長時間にわたりご議論いただきましてありがとうございます。次回の会議の日程等につきましては、また改めて調整をさせていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

事務局からは以上でございます。

【市長】

では、今日の事項は、これで全て終了でございます。

これもちまして、平成29年度第2回の桑名市総合教育会議を終了いたします。今日はどうもありがとうございました。

— 了 —